

病害虫発生特殊報 第1号

富山県農林水産総合技術センター所長

ツマジロクサヨトウの初確認について

- 1 病害虫名 和名：ツマジロクサヨトウ
学名：*Spodoptera frugiperda*(J. E. Smith)
- 2 対象作物 飼料用トウモロコシ、スイートコーン、ソルガムなど
- 3 発生経過
 - (1) 県東部地域の飼料用トウモロコシほ場に設置したツマジロクサヨトウ用フェロモントラップにおいて、令和2年6月25日、本種と疑われる成虫が捕獲された(写真1)。名古屋植物防疫所伏木富山支所に同定を依頼した結果、6月30日にツマジロクサヨトウ(*Spodoptera frugiperda*)と診断され、県内で初めての確認となった。なお、県内では、農作物における本種幼虫の発生及び被害は確認されていない。
 - (2) 国内では、令和元年7月3日に鹿児島県の飼料用トウモロコシで初めて本種の発生が確認された。※現時点(令和2年7月1日時点)までに30府県で本種の初確認に関する特殊報が発表されている。
- 4 特徴
 - (1) 分布
本種は南北アメリカ原産で、2016年にアフリカ大陸で発生が確認された後、2018年までにアフリカ中南部のほぼ全域に分布が拡大し、2018年にはインド、スリランカ、バングラデシュ等の南アジア、タイ、ミャンマー、2019年には中国、韓国、台湾でも発生が確認されている。
 - (2) 寄主植物
アブラナ科(カブ等)、イネ科(トウモロコシ、イネ、サトウキビ等)、ウリ科(キュウリ等)、キク科(キク等)、ナス科(トマト、ナス等)、ナデシコ科(カーネーション)、ヒルガオ科(サツマイモ等)、マメ科(ダイズ等)などの広範囲な作物
 - (3) 形態及び生態
成虫は開張約37mm、雌雄で外観が大きく異なり、雄のみ前翅の前縁中央部付近に斜め淡色紋があり、翅頂に逆三角形の鮮明な白斑を持つ(写真2)。終齢幼虫は体長約40mmで頭部の逆Y字及び尾部の斑点が特徴である(写真3)。本種は暖地に適応した種(南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯原産)であり、熱帯では年4～6世代発生する。南北アメリカでは毎年夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬することはできない。

(4) 被害

幼虫が植物の茎、葉、花及び果実を食害する。若齢幼虫は葉を裏側から集団で加害し、成長すると加害しながら分散する。摂食量が多く、食害部には多量の糞が散在する。

5 防除対策

- (1) 多発すると被害が拡大する恐れがあることから、ほ場をよく見回り幼虫の早期発見に努める。
- (2) 本種の発生が確認された場合、植物防疫法第29条第1項に基づく措置（有害動植物の防除等の措置）として、国の選定した薬剤による散布指導を行う。
本種に対して使用できる農薬については、以下の農林水産省ホームページを参照のこと。農林水産省「ツマジロクサヨトウの薬剤防除に使用できる農薬一覧」
[URL:https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kokunai/tumajiro.html](https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kokunai/tumajiro.html)
- (3) 農薬の使用にあたっては、散布は無風又は風が弱い時に行うなど近隣に影響が少ない天候や時間帯を選び、風向、防除器具のノズルの向き等にも十分注意するとともに、隣接農作物の栽培者に対して散布予定農薬の種類や散布時期等を事前に連絡するなど、農薬の飛散に留意する。
- (4) 幼虫の分散及び蛹の残存を防ぐため、収穫後は直ちに耕耘する。

【参考資料】



写真1 フェロモントラップに捕獲された雄成虫



写真2 ツマジロクサヨトウの雄成虫(左)雌成虫(右)(開張約37mm)



写真3 ツマジロクサヨトウ幼虫(老齢約40mm)

※写真2、3は
農林水産省原図

富山県農林水産総合技術センター 農業研究所 病理昆虫課

TEL 076-429-5249 FAX 076-429-7974

情報参考 URL <http://www.pref.toyama.jp/branches/1661/index.html>